

揚州名所巡覽圖繪

三



播磨名所巡覽圖會卷之三目錄

土山

慈眼寺

高祥寺

高畑村

安養寺

新在家古塔

横野寺

教信寺

本堂 洞山堂
教信上人塔 鐘樓

中口古塔

平井村教心僧

泉式部塔

具平親王塚

下居清水

日圓大明神社

左子岩

二塚祠

常樂寺

崇祿天皇陵

七騎塚

中津村城趾

妙見大明神

天満宮

常任寺

五社大明神

加古驛

瑞應寺

二見浦

天満宮

觀音寺

福勝寺

徳源寺

長徳倉

假寝園

蓮花寺

任吾祠

松元寺

福里村代神樂

別府

任吾祠

砂子大明神

季彦御古塔

別府

任吾明神社

鮮松

比奇灘

尾上天満宮

養回社

高砂

荒井

十輪寺

迎大明神

常光寺

稱名寺

宝苑寺

印南浦

尾上松

崎宮

多砂泊

荒井神社

十輪寺

迎大明神

常光寺

龍泉寺

牛乳天王

印南浦

尾上松

今津川

高深

高砂神社

多砂系

月西上人四跡

八幡宮

赤松政村墓

加古川

加古川

園長寺

天満宮

石船

大川

高深

高砂神社

多砂系

天竺徳兵衛宅

印南郡

石舟古城

加古川

泊大明神

弁財天社

米田村

石屋

神告塚跡

妙見大明神

生石明神

乃瀧舟戸

大日寺

安養寺

飛神塚

渚の舟

圓通寺

本村城跡

八十石陞

腰掛岩

真名舟

神丸村

龍山石

籠基

入輪塔

梨原寺

高座石

曾根天満宮

黒岩

金剛寺

八十河原

鞍馬寺跡

石舟清水

生石明神

石船

白矢系跡

六騎武者塚

倭保崎

細堂

曾根松

松笠山

後田寺

佐伯寺古松

毘沙門岩

乃瀧法隆寺

石宝殿

阿弥陀岩村

時光寺

佛心寺

加茂明神社

梅乃舟

蓮教寺

松笠浦

大垣 天神祠 寺三ヶ寺 的形 神祠三基 寺三ヶ寺 楠岩 的形天邊宮
 海岳寺 大帯祠 七社神祝 八家地苑 赤松上総公墓 報恩寺 赤松天祠 澄賢石 若一王子神祝祠
 都深井 安樂寺 八幡宮 觀音寺 天祚山古塔
 去取摩 長樂寺 助永池中鐘 高御座山
 赤松法道墓 鷹梁山 志吹祠
 大澤清水 唐ヶ窪村
 大谷村 法華山一系寺
 法華山一系寺

播磨名所巡覽圖會卷之三

郡古加

土山 海石七加古郡

慈眼寺 海石の西 海村

通照山高祥寺 日村

高畑村 西山

新在家古塔 奥系を用ひ痛著諸國より集り 傳ふ松樹とて又今入てみりたりなり人の古懐より一郷人之後深草院 建長六年又荒れしとて是利尤馬改義氏の墓方り云

横尾山横尾寺 新基法道仙人之又十八代小松天皇の御新御所寛平法皇澄居たり伽藍經 堂數十の坊舎ありし又兵火より今一寺一坊觀音地苑の二像華田の園 伽藍あり觀音の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院 念佛の靈記の實又思以一名横尾の觀音と云



念佛山

教信寺

用基教信上人奉
阿弥陀如来山
寺の教信上人の所着
と安委以 盗難ありて
は首の 寺深く曰く
教信上人の入室
に十九代光仁帝
乃皇子御来十々
の附南都真福寺
と抄りて出家
夫より諸法と傳
達し逐て揚を
加右郎印南の位に
又停り念佛三昧



入く貞観八年

八月十八日
遷化



下居乃清水



九日より十日日まで一七ヶ日乃同念佛の勅符給して末流又十余寺
 出勅はとらんむしし諸堂殿重なりし度々の兵火よりて己滅し
 今本堂岡山寺親善堂持護教信上人塔僅に遺り

野に古城趾

日本長門に即元備門尉の居城之別本長治の幕下にして
 天正六年御茶屋吉野とまり付終に敗れ

平野村の心僧

西の懸集村の中其地國平野と云ふ所なり海に向ひてかたむらう
 野村の心僧は後接してゆへ法師ありてそ心乃國邊の妻と云ふ事しり
 おりて後我親野

和泉式部塔

細田はもと下居はもとより式部二條院の尉と東門院の官女より
 の尉と屋は獨り命符を遺りとらん

大江雅致の女は

和泉守道真の嫁し小式部と養む其後道真は離別
 せしとて小式部と播磨國赤穂郡若狹村に放らるる又平安保昌は再婚して

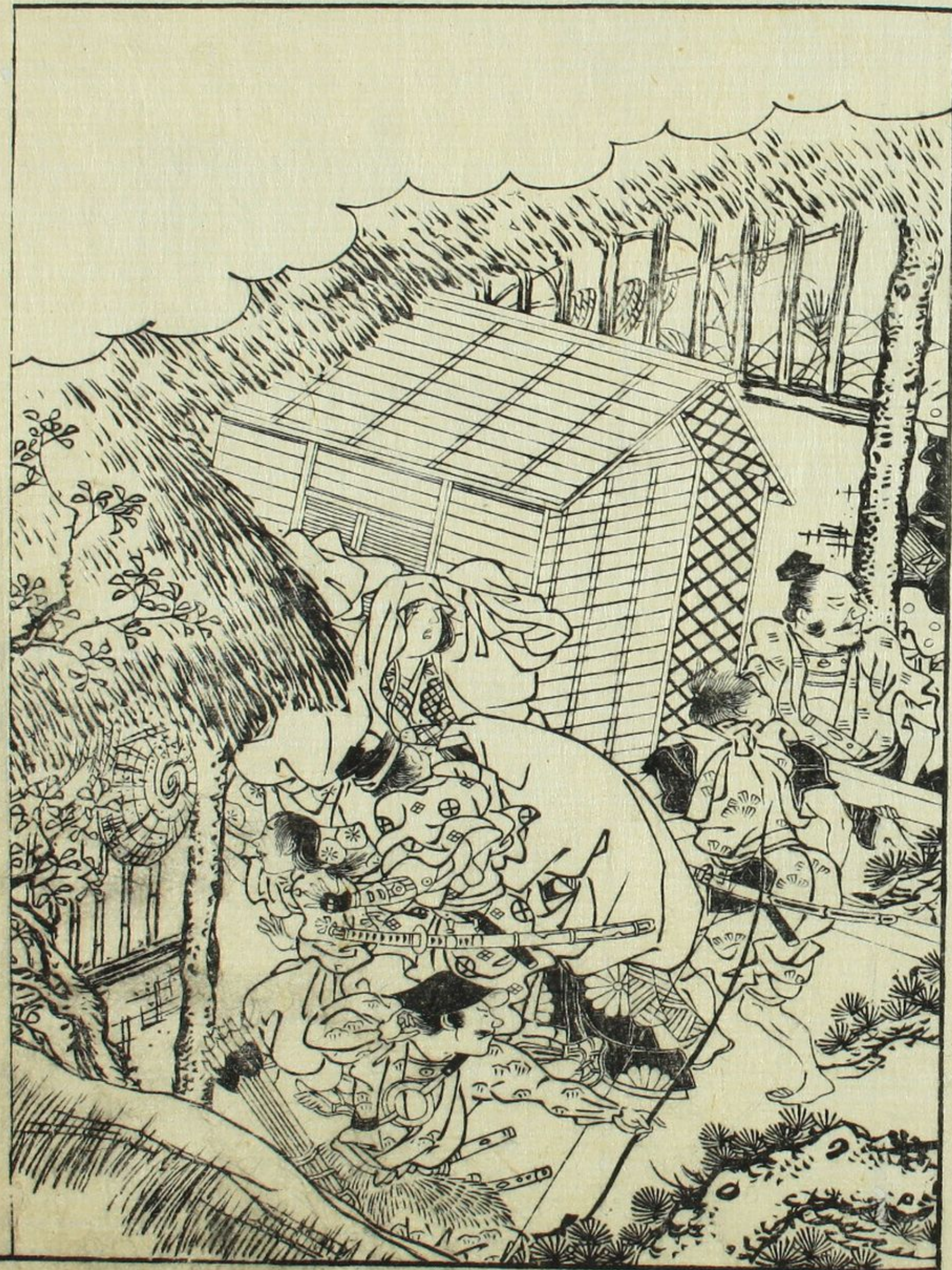
小式部は遠く

けしり吟ひ書寫山乃性空上人は値て法華經化城喻品の
 後冥入於冥の文の意を説き入と徳と和歌を詠ん

晴より園き

中へ入りぬる小野せむの摺の月 和泉式部
 右にけいづつて乃傳流たりゆふ拾遺集には雅致の女ありて和泉式部

晴より園き中へ入りぬる小野せむの摺の月 和泉式部
 右にけいづつて乃傳流たりゆふ拾遺集には雅致の女ありて和泉式部



七 孫 塚
 其 孫 塚 之 戦 記
 六 郎 孫 塚 之 戦 記
 七 郎 孫 塚 之 戦 記
 七 郎 孫 塚 之 戦 記
 七 郎 孫 塚 之 戦 記

中津村城址

鎌倉後立御所の末系掘原十右衛門入道が居りて城あり

妙見大明神

津村にあり 天満宮 粟津村

薬王山常住寺

寺あり 五社大明神 寺あり

加右釋

加右乃松 小川の流と郡界と 寺あり

加右郡又屬 加右川村 印南郡又屬 二郡家つき乃釋

松原にそこと見えは攝津の地なり ねまやんきよくと

附記 古平記 新田義貞の病氣よくありしが 乃右乃松の勢を率して

西園（乃）終は後陣の勢を勢園（乃）小撮六園 加右川又日通向なる

其勢都合六の余勢なりて赤松城（考）はきと 城の宿と押考ゆふ

加右島

此島は今なきはたに小島と傳ふ所の松樹多し... 乃右乃松の勢を率して

所名

加右

今市川... 乃右乃松の勢を率して... 乃右乃松の勢を率して

所名

加右

乃右乃松の勢を率して... 乃右乃松の勢を率して

我心鹿子乃流りの網子籠へゆへ心やむとれとる
 うらもへてかこれ流りまひく網乃初来り君又何せとるん
 加古驛 今加古印南郡界と跨り家加古川と家つき
 地より上又加古駅と物り寺家町とつとてつり

二見浦 郡中東の海辺あり今東二見の二村あり又伊勢二見名有り
 和歌深難しと分明く流るは極上の池と得てとる

夕月夜母つるまるとわくしけ二見のうらけつてこそま
 各号 長徳庵 二見の山子身 瑞應寺 東二見

天満宮 東二見より東の如と 補陀山観音寺 上二見 瑞應寺 東二見
 徳源寺 上二見 長徳庵 上二見 佐渡園 二見の山子身 瑞應寺 東二見

佐吉祠 古加村あり 潮音山松元寺 日村 福里村代津樂 曲舞の歌下村あり
 二二二の目 二二二の目 二二二の目 二二二の目 二二二の目 二二二の目

青雲山蓮華寺 本村あり 佐吉祠 日村 砂子大明神 本村あり 桑津大明神 本村あり
 大納言桑津御古城趾 七の宮あり具平親王六代後三後中流大納言ありて桑津大明神あり

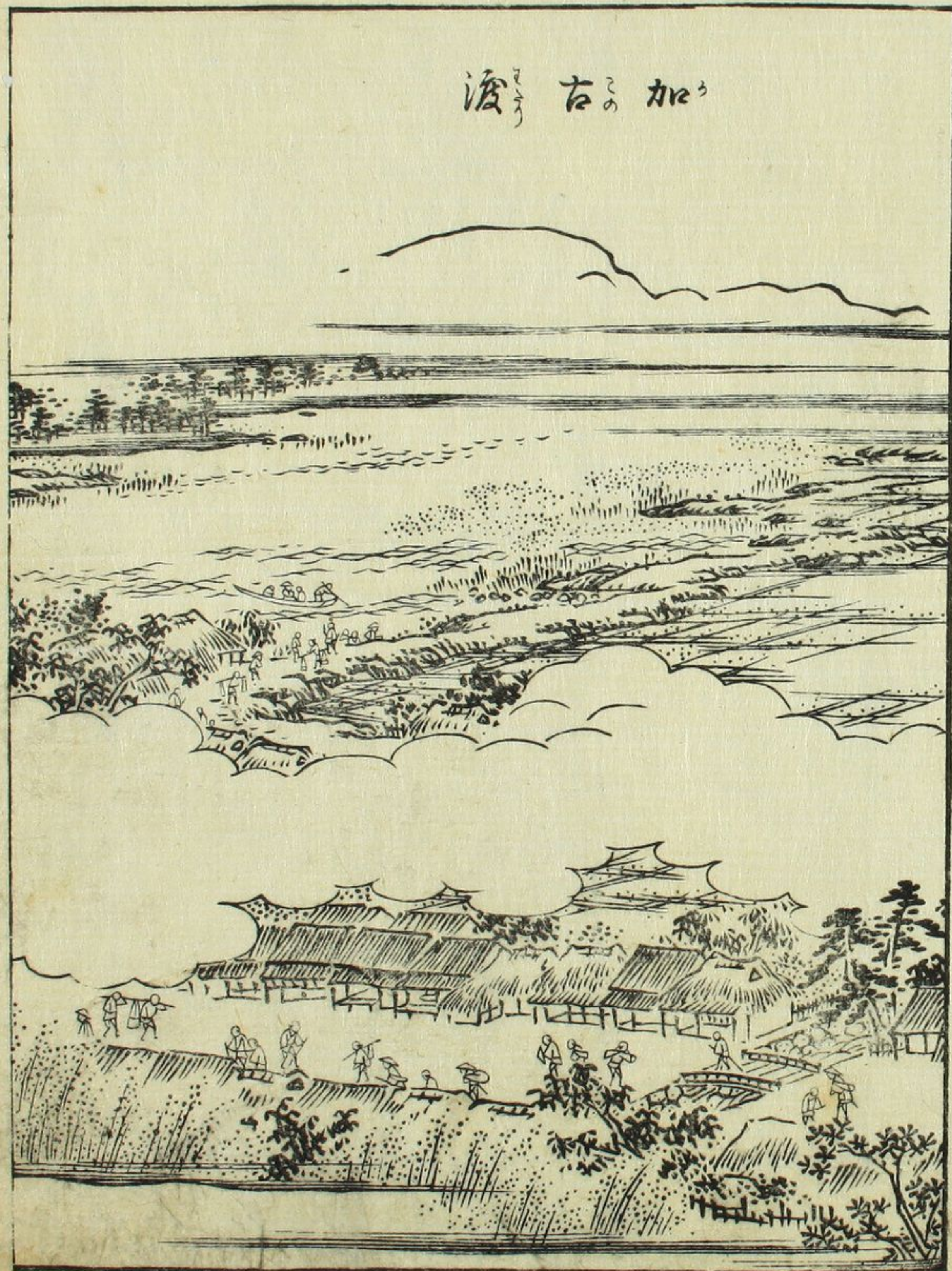
月掛の舟 濱にありて加古郡より下白川後添徳郡桑津の舟と後添徳郡の舟とあり

日丘社



延喜式津名帳云
 日圓坐天修儀
 比古津社 加古郡小社
 相殿不葺合する
 王依姫

加右の渡



加右松



別府

赤松園心の松あり
別府八十節と云者赤松あり加吉川の辺河内の一木と云ふと云十丁と云ふ
依て一本と改めて別府と云ふ松の八代村の案よ見合ふべし

恒吉明神祠

別府の邊にありて村中
恒吉明神祠 別府の邊にありて村中
手松あり 赤松の石

先明山宝冠寺

別府村 牛頭天王 谷田
寺宝十三佛の画と云ふ十三本ありは内一本あり

聖陵山園長寺

長谷 境内岩屋あり
寺宝十三佛の画と云ふ十三本ありは内一本あり

比奇灘

別府のやりの海なる一帯
比奇灘 別府のやりの海なる一帯

印南浦

二見を在別府の浦
印南浦 二見を在別府の浦

天満宮

安田村あり候乃宮と稱し近郷十二村の氏神と稱す八月晦日松林に抵八丁なり
天満宮 安田村あり候乃宮と稱し近郷十二村の氏神と稱す八月晦日松林に抵八丁なり

尾上天満宮

尾上松 尾上天満宮 尾上松
尾上天満宮 尾上松

生竹山觀音寺

尾上松 生竹山觀音寺
尾上松 生竹山觀音寺

社記

云播州尾上の津功皇后三韓征伐御降朝の後恒吉の内津と
日村の鎮座也高砂と号く石山は池田より山にけりは續き人家多
くて松乃彼来り道近く漁獵のたよりもよほしき不世衰多と積りて
泊りの波も遠浅とかり松の出入もよほしき不世衰多と積りて今
の高砂と号く松一帯と移り日石と号く高砂尾上とお別りて隔
り八丁斗之相の松の天正の比羽柴秀吉三本城別所小三郎と表る
附小三郎松を毛利輝元と清人即藝州より小早川隆景吉川元
春西大將とて惣勢三万金誘兵松三百余艘明石郡矣恒の浦より着き根
と三本城へ運送の後治の乃又惣軍今の尾上高砂の邊より陣と号り
かり松を伐て築くはまより松朽て慶長九年松を池田輝政乃治
して松根のよみ津祠と移り左方より鐘樓と建てたり

尾上松

尾上松 尾上松

尾上松

尾上松 尾上松

所名

所名

所名



西二見



二見天神

三十一

別府
任吉

松の林本に
て幹の極虎の
跡のつく

枝葉の外は
ぬき

園に二十歩

巨に二十歩

右といふ余

実の精を平と

ぬき靈木

なり



社参

松の遠く

松の遠く

今朝の

松

瓢水

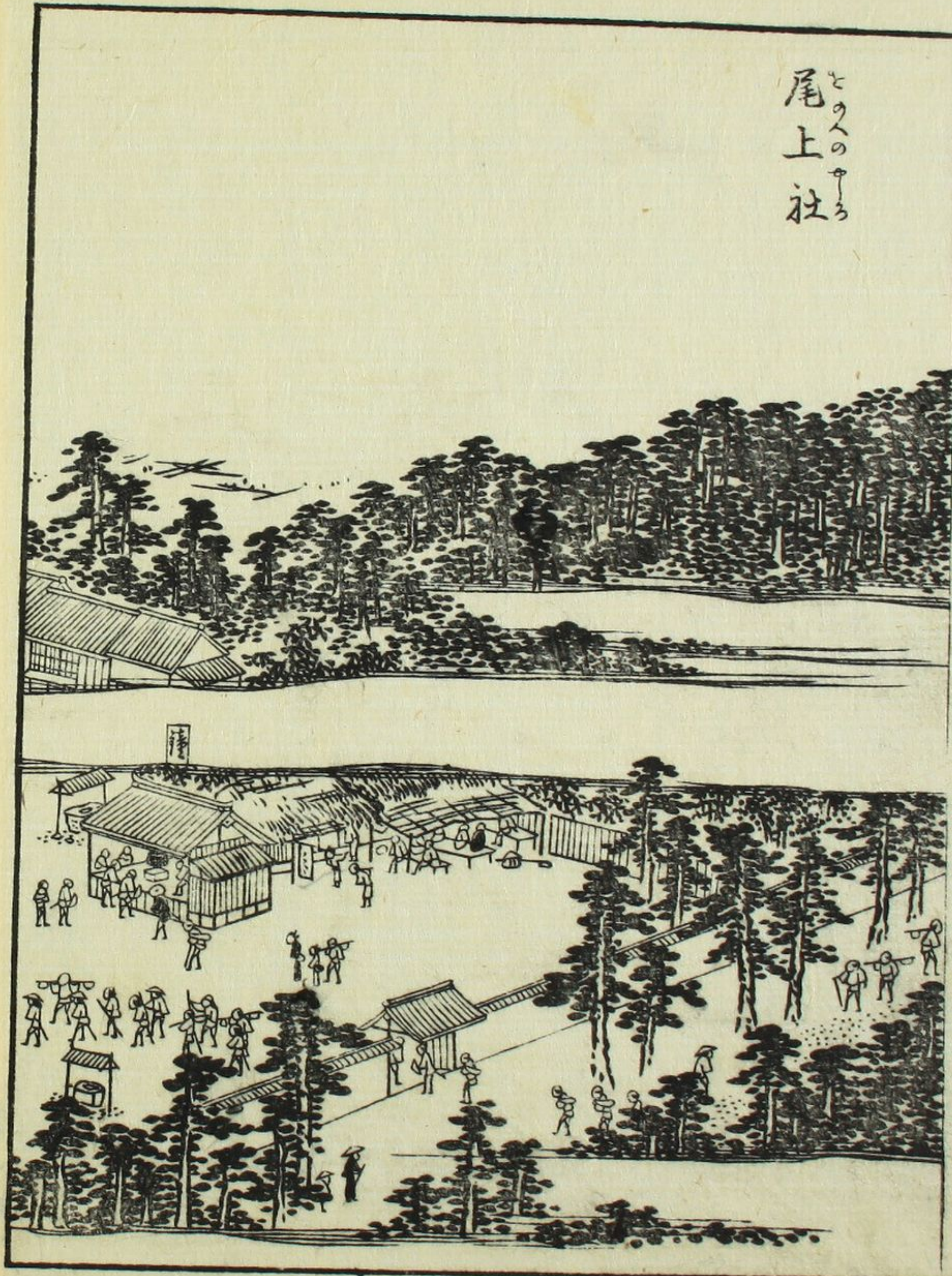
瓢水の別府の巻にて
流修の巻に増修の巻に
系朝時入信後篇

今朝の





とりののやしろ
尾上社



た甲かありて浪花は道る不あり 攝又六年十年の年号抑がらうよんえ
うり是西晋二世惠帝の所うて日本寛政九年までいり三百九十九年以後
の日本承和入年よりには百余年之を以て尾上刀回山の二種とせりよるに
百余年の物はは見えたりされども百海より佛經と始りて日本へ渡せり
明天皇十三年よりて九百二年の間に錦明天皇八年より内藤の持と
養老の二十六年斗後の中へはけはるは是より百海或は異國とのものを
徴として造りしり又の被さるも求せしめられしが持たは尚さうりかの後
又の天王寺六宗の持とらひしと思へり漢後の持とては日く竹筒の形に
物もさうりしりさうも持とらひしりさうの持と三舟寺儀及の持と
児婦の耳と持とらひしりさうも持とらひしりさうの持と三舟寺儀及の持と
みいあまはしりさうも持とらひしりさうの持と三舟寺儀及の持と

石 尾上村の田の中より俗にあまの石と云ふ
養田祠 養田村よりけの氏神と云ふ
今津川 尾上村の川なり
高砂 尾上村の川なり
津國 今宮の河側なり
大川 加古川の川なり
高砂泊 尾上村の川なり

所名

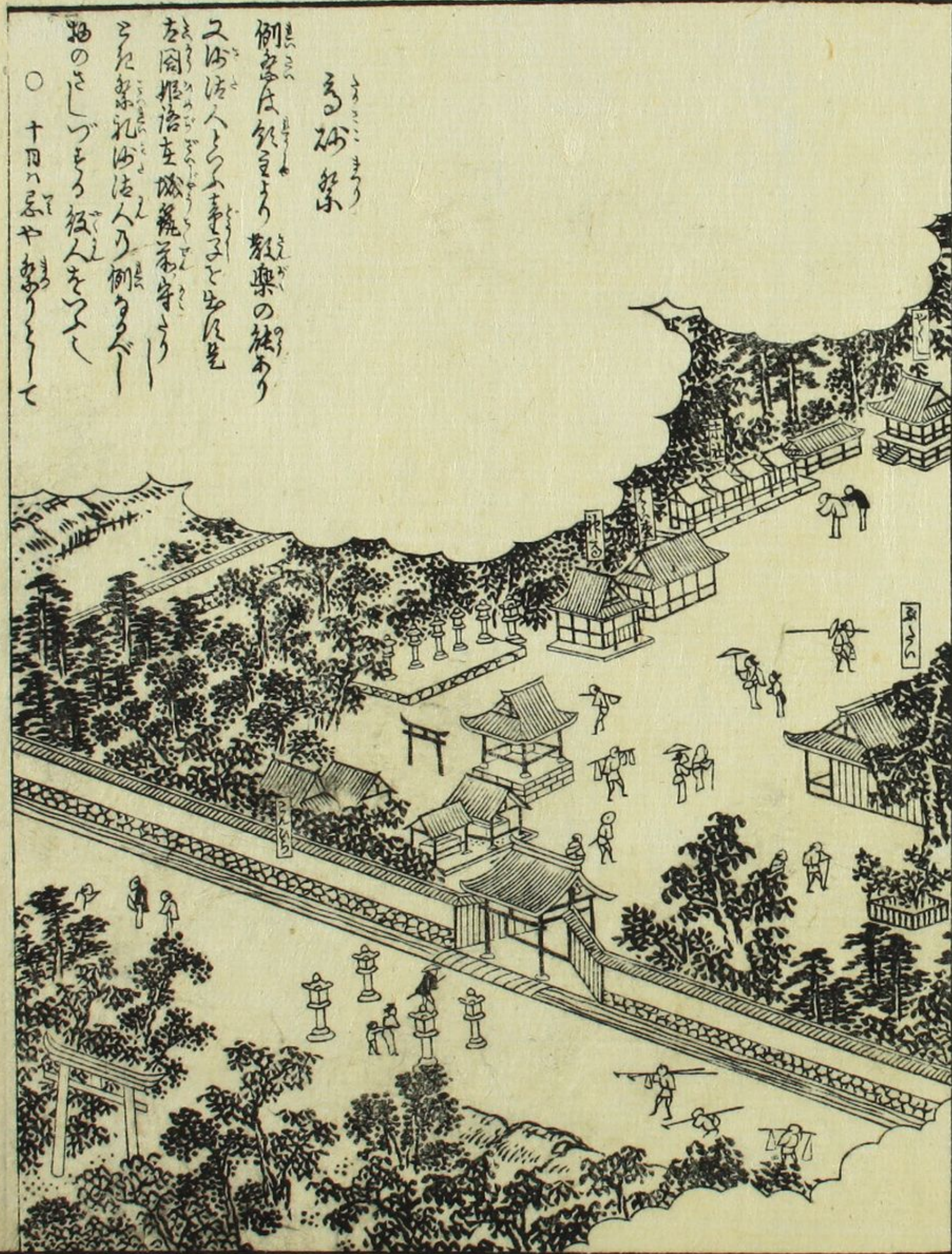
砂の向之其後官家屋敷にて民家の砂の渚國の通商大場の湊とありて
大度つちりよ川あり下は海あり是船の出入便してきて
易いより本邦出郡の名不れが名なり抑は風流の名家と
今松林を倉庫と換て風流と改めしは備わきと堪たりされども名
不の舊名と抱きしは先南朝の神璽守護望園の比

高砂泊 尾上村の川なり

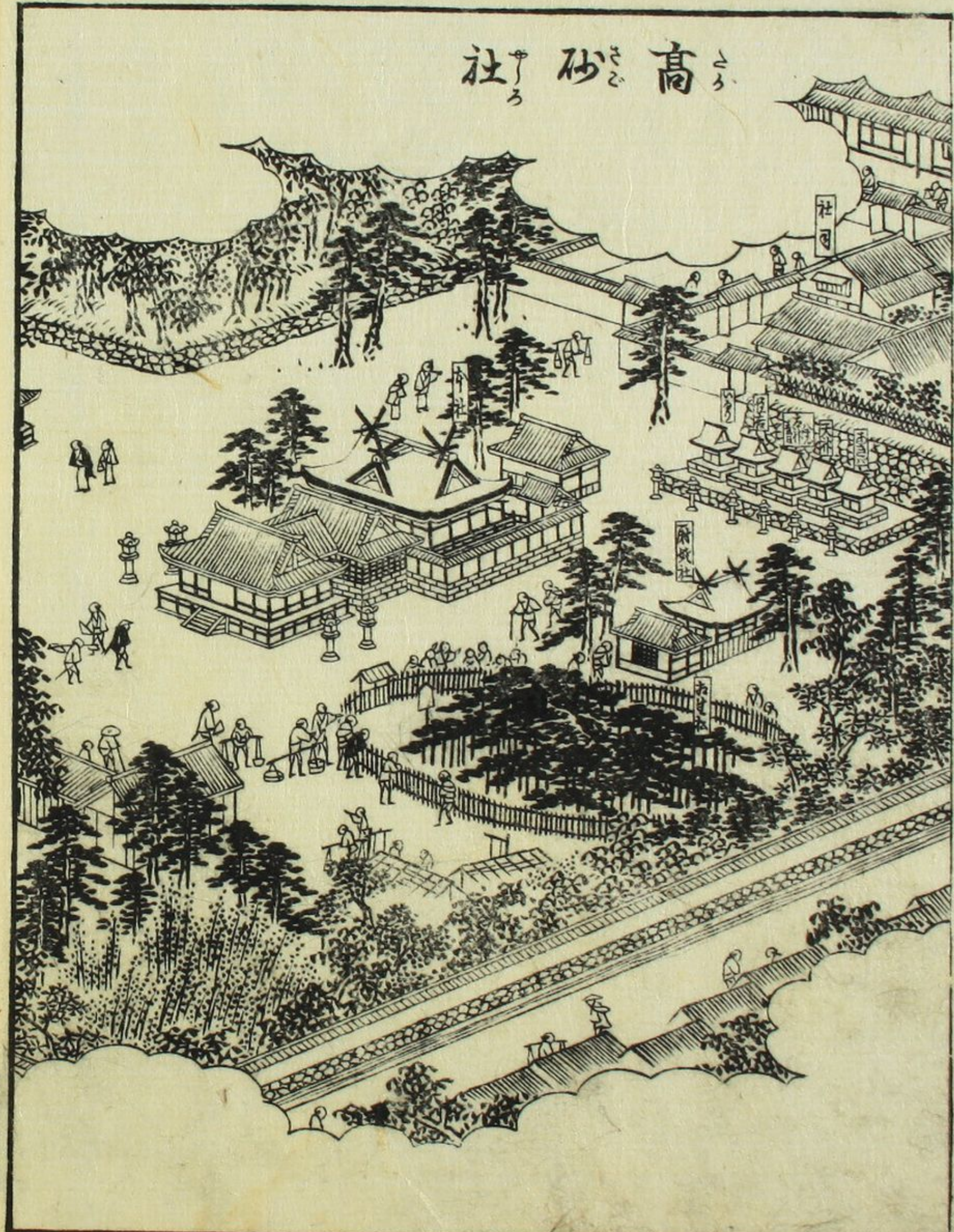
高倉院殿海津幸の記よりわらうるもさうりしりさうの持と三舟寺儀及の持と
かきとらひしりさうも持とらひしりさうの持と三舟寺儀及の持と
りさうの持と三舟寺儀及の持と

高浪 尾上村の川なり

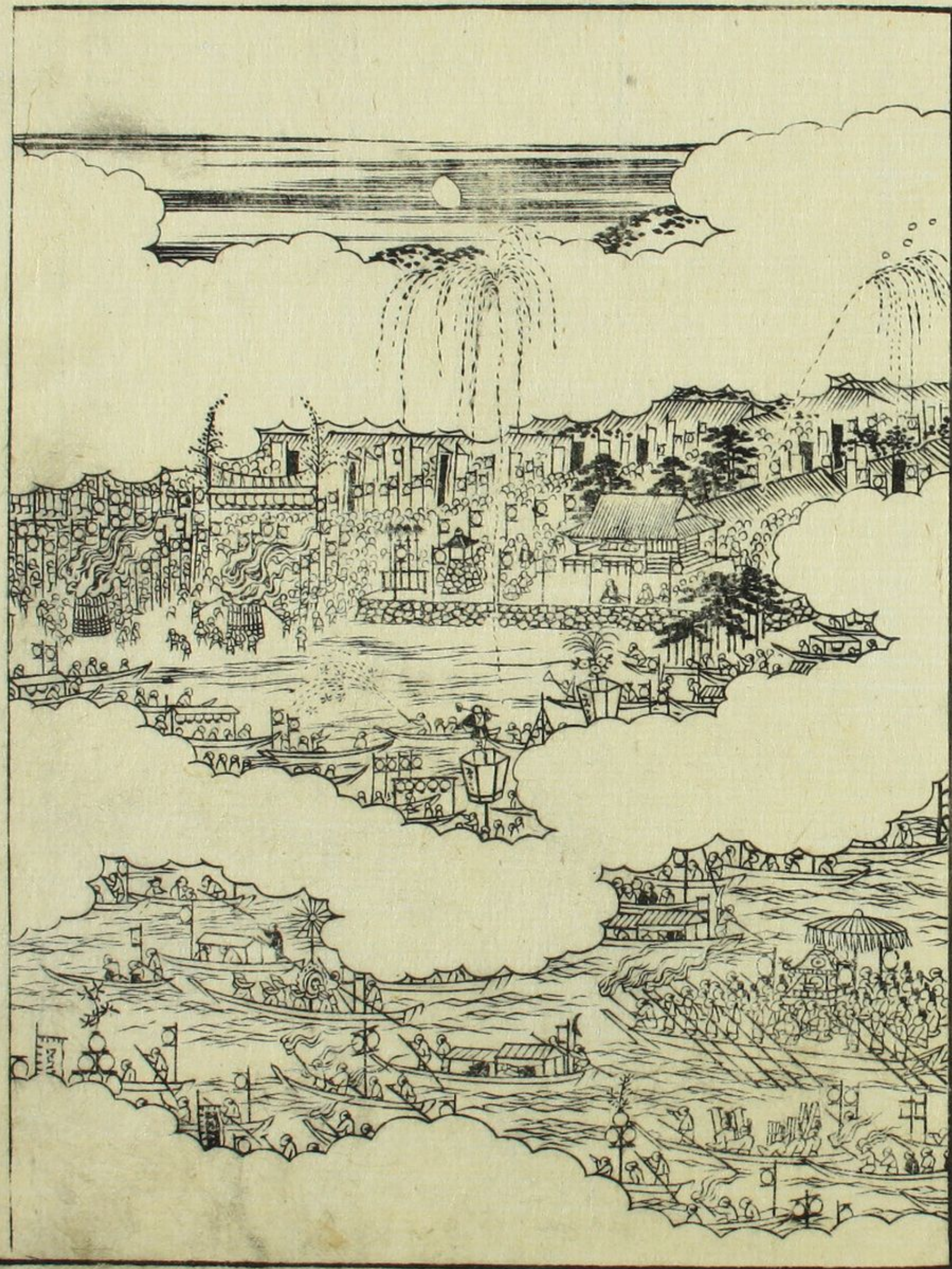
攝國の海と云ふなり



高砂 高砂
 又高砂人より 教樂の社あり
 左高砂治主 城籠 茶守より
 さら茶礼 高砂人より 初まぐり
 物のに つもる 飯人を つて
 ○ 十月の 忌や ありて



高砂社



後接
物ろくを移してよりなる深りたまのこまやらちやをぬらん
本綿崎 是れもろのうらそい
三ノ浦 三ノ浦といふ小をさうんさうりむとわらゆふたのう

荒井 る砂の西より南陸をさし北上せしとぞ
今のはし里よ加た川の分派ありてさうりあり
神社 氏神は祭神大己貴命
例祭九月九日

高砂津祠 南極川の南天山の比
梶系系りの神社あり
高砂津祠 祭神素盞鳴鳥命
禰田姫大己貴命
例祭九月十一日

尉波神社 相老の松
の傍あり
石鳥井額 被持明院殿
河津系
戒河二基 南門と出で
海濱あり
系記里丸あり

高砂城跡 梶系梶系系三三三流系は
て別石長治に属しける砂のふか守渡る

附中国毛利輝元三本の別本に河橋一吉川元吉小川清元三万余
騎と添らる三本の城へ送らる兵糧數百艘に浦三三三里が同元流に相
系る否る砂より三本とのる國所と多く居通治を停り織田信忠三万余騎
を以て三本城と囲む毛利梶系三本と通せり後浦は浦と月日と送るかくて天
正八年の春三本とも出城し居り其後慶長八年池田が輝政攝
置渡三ヶ國の太守として浦梶系が城址と云ふ家臣中村を殿女に福に千
又百石侍士百騎と添らる同日代とせり輝政の命として教材と集りて大船と造
りし 三十三易
樓十易 其外も石余の大船百艘船り輝政の嫡男武元守輝貞の代日並

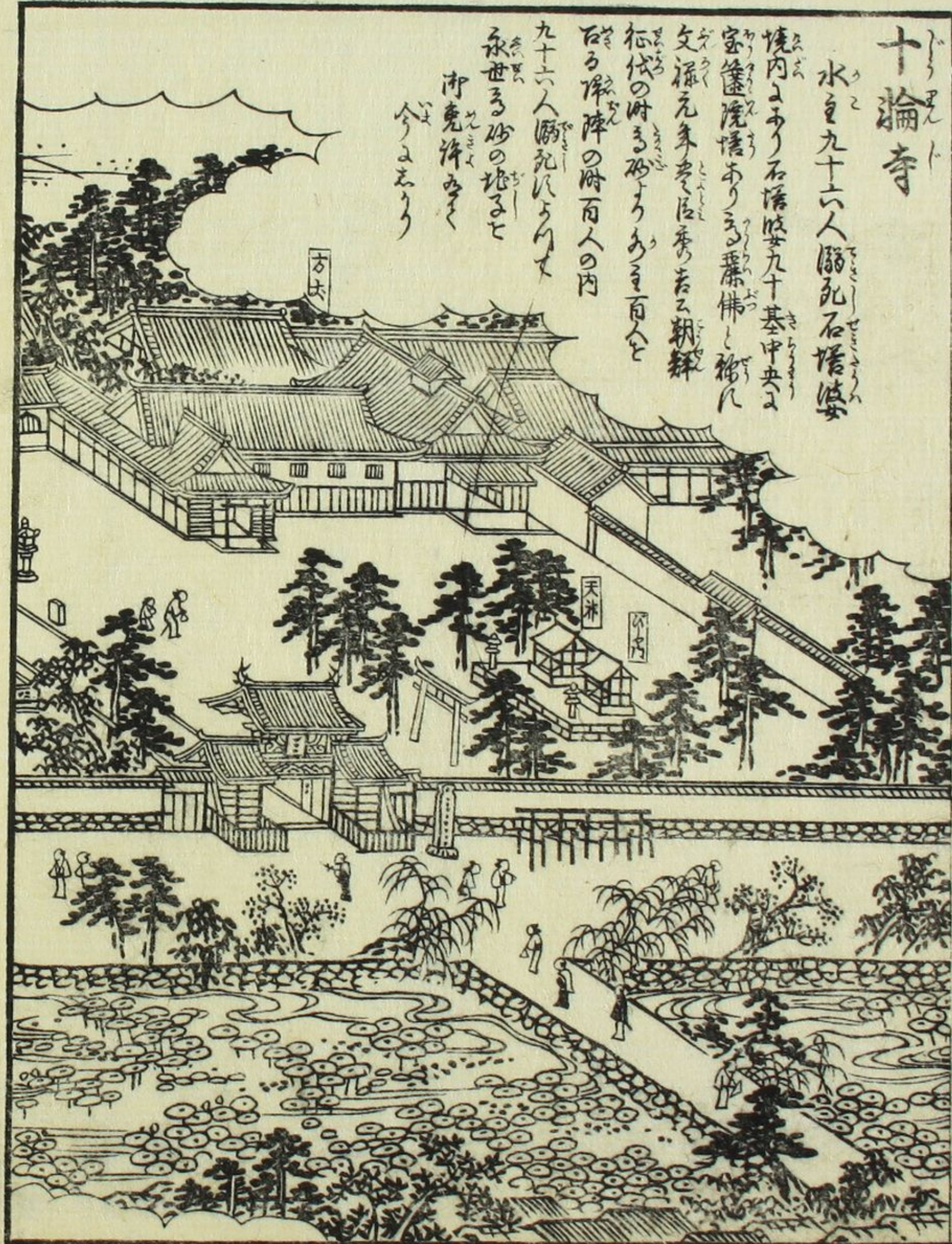
本藩守は福一万三石代場りけ浦の守渡織りさせり罹郭石壁築し本
戸を十一口以定り其後元和年中本回忠政これを破却して浦浦を牛乳
天王と造營ありしと

十輪寺 高砂村中の
うらやう 本尊阿彌陀佛 其阿
祖師寺國光大師の画教九方は十一面

國光大師之建永二年三月十九日大師滿遷の附け浦浦の附け浦を考りて
治那まといふ者も徳は降依りこれよりして衆俗の陸吹近郷より大國て高寺
表云京と改り今西山光明寺本山後樂寺に屬して西山一流の権檀林小
本寺にて大師二十ヶ所所吹拜茅三番之順徳院建曆の年大師降治の所
又け浦よりさき蓋念佛堂の地はあきり改宗は後極浦十万人上人渡
小松原祥海寺にて大師堂觀り所教とるを得て開山の中緒をさし高寺
納む是に依り地所山の四号と堂龍山と改り表僧門の教も知慈院宮一高寺
親王御深等といふ寺堂は長文の教も羅羅系長三七堂の殊教とあけり
の法事いふ所適遷の附の月よりして三月は執りる

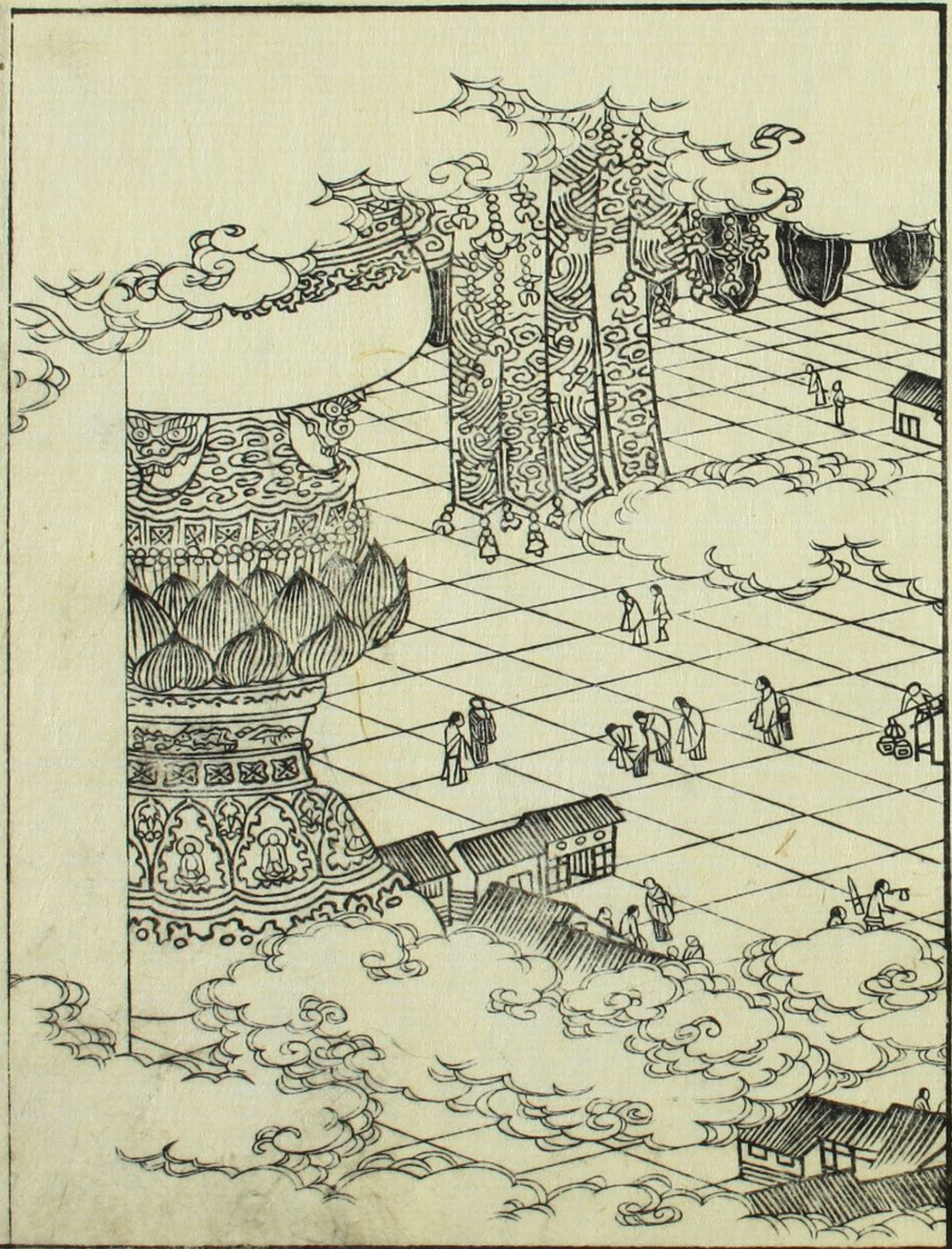
天空月西上人庵室跡 南平町の
南あり 大徳知藏とて右回道灌の嫡流に正徳年中

二月廿九日高砂遷化に尚徒生傳の冊をりて生渡の幼状をさるせり



十輪寺

水石九十六人願死石塔婆
 境内あり石塔婆九十九基中央に
 宝篋院塔あり三層佛と稱し
 文禄元年冬長考若く朝経
 征伐の時死すありあま百人と
 記る塚陣の附百人の内
 九十六人願死はよんで
 永世の砂の塔と
 御免許さく
 今又さうり



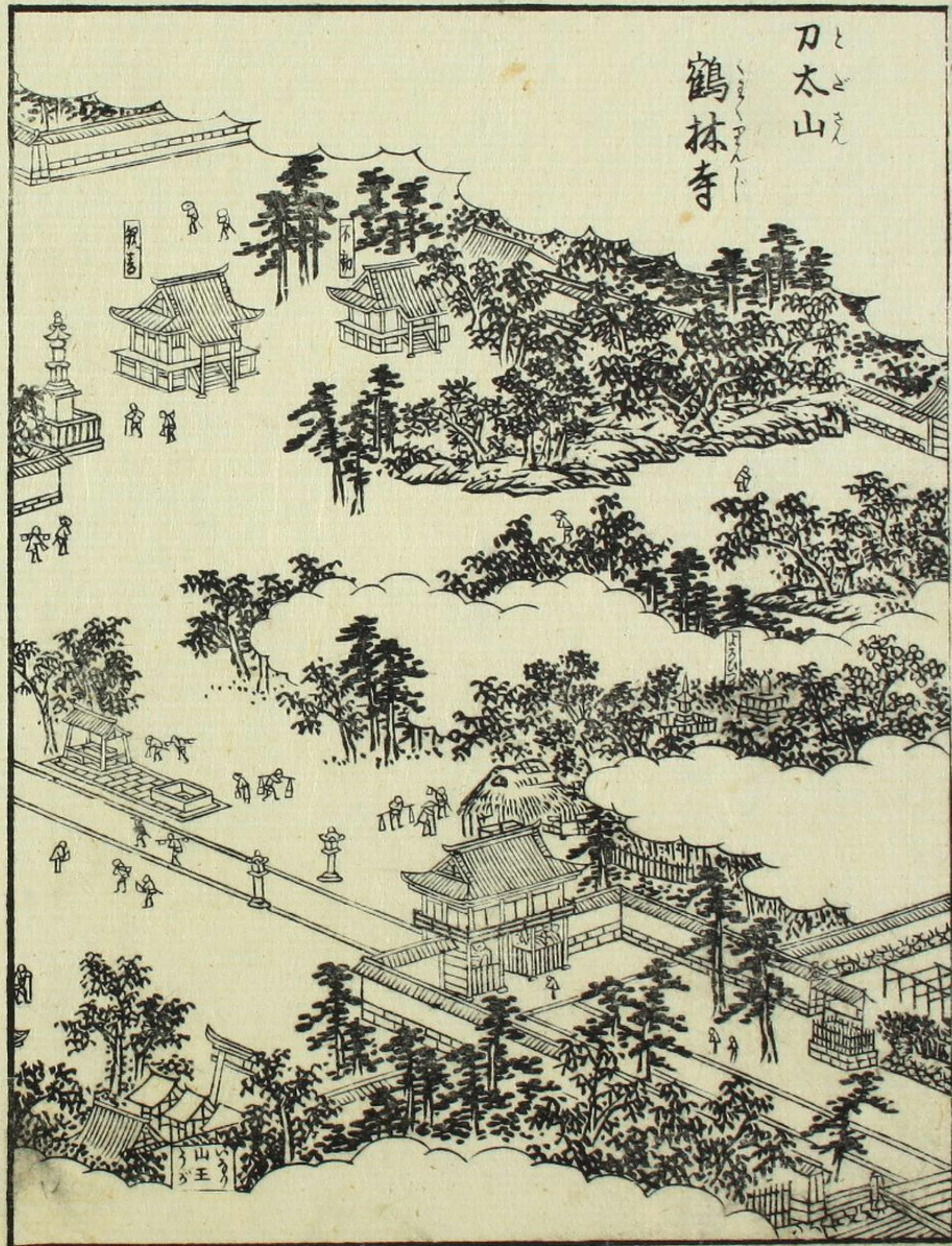
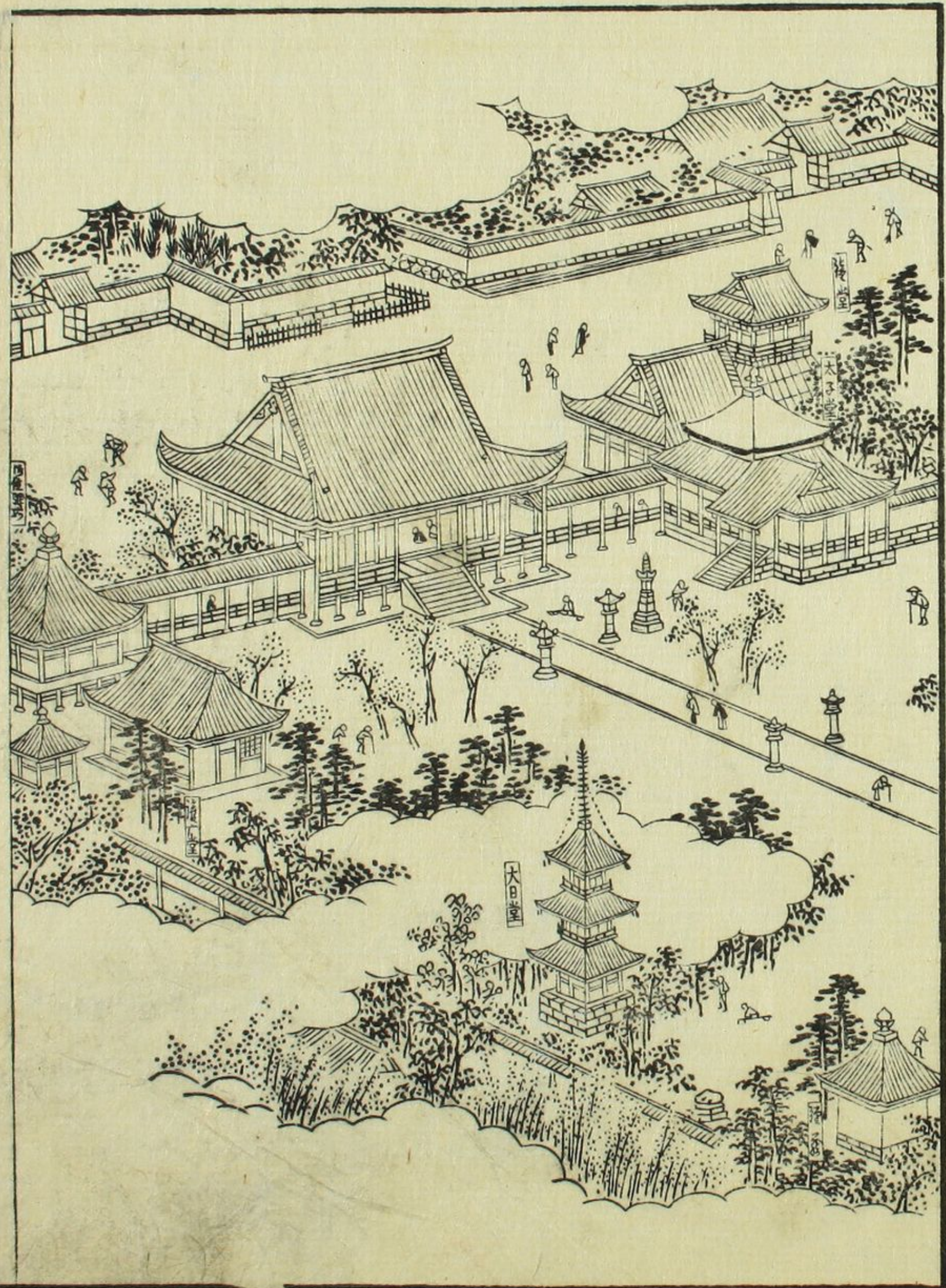
天竺德兵衛宅 三つ砂に取而も赤穂を德去す 先仁慶長十七年丑年出生の若
よて寛永三寅年十月八歳とて天竺(後) 延宝八年六十九歳とて刺殺
法名と宗心とあり

附記 付右日本より唐土外國海通商の事ありて珠と九州造より多く後より南
右國秀の書にのれもなげりやろが津山代寛永十二年より停止せりて聖船入
眞のくま空り昔日本通商の船といて九艘之長誘りて末次氏二艘舟幸氏
一艘荒本一艘系屋一艘泉州横江舟作松屋一艘京都舟幸氏一艘
角倉一艘伏見屋一艘之船中其の造り又似たりと有り 三つ砂を徳去す十
又嵐の所より被角倉の船乃水より入りて大明南系幸くは谷定大寛の船
くま空り通るありて天竺徳去すは其の圖書より有りなり

刀田山鶴林寺聖靈院 坂本村より六七十 聖創入皇三十一代敏達帝十二年
聖徳太子十二年の所附佛法興流の地と天文將士とトセ給ふ其
考文曰攝州藤子郡山海の中間に廣大の平原あり是乃代不持佛
法繁栄の地と云ふなり又和國磐余雙柳宮より紗縹もて遂に用明

帝十二年三月上旬壬子十六歳の所附け地と舊倉と建營ありて秦川
勝と命じて三圃に面り梵宮を營り給ひ釈迦三尊に天王乃像内
陣の北に柱より八大令別童子の敷と圓一に像あり三尊の佛像と画く
東の方より子の所宮殿あり内には天王乃像と圓と右の方の厨は
あはさる二歳は十六歳に十二歳三教合體の尊像あり即ち子の所
頂の發と拙させ給ふなり世と拙發のまゝと稱へる 又西の方を極よ三
板板と云ふなり極蓋
の造營後後いぬは福有らんをまつに極例は今より抄ひて兩尖の釘はし是即ち
とどろきの堂創より今よりあつてんは二百年の聖靈を極ぬきても圓禿の足は山山に二方
に是に二の隅あり是と天王像と對し 舊高号は日本に箇の道場は天王寺と云
ふ山山の間は又久々ありを十二歳より十六歳の所附とてくま空り
け山外に鴨下と皇右所宮石清水八幡宮乃而祠今あり 如後祠の
後後村之

八幡宮より 佛殿 九圃に 奉る桑降如来 日先月光威臨天毘
今福村之 沙門天 其の運 十二祀 其の阿 創建の奉釈の玄苑國大目身人郎春
則之より有餘年の星をわと歷ぬきに破壊して天正元年尚國二本



刀太山
鶴林寺

城別所長治の再嘗^に 観音堂 ^に 本尊^{長二尺八寸} 鐘樓 ^{三周四面}
二月に寸豆を尺七寸、龍宮は竹藪の形あり、持斎三ヶ不尾上の種より取立てこれ唐物なり 護摩堂 ^に 本尊^{長二尺八寸} 阿彌陀
 如来左右観音勢至 ^{共ニ惠} 日護摩堂 ^{長二尺八寸} 本尊^{長二尺八寸} 兼佛 日光月光
 十二神 毘沙門天 大黒天 千手観音 ^{浪華津田三層宝塔 東白より}
 本尊^{長二尺八寸} 大日如来 ^{惠心の惟け塔の坤の方より三面の} 二王門 ^{會別力士瓦は護摩の惟右に護摩の}
佛院の震後 稻荷祠 山王権現 宇賀祠 十二社 三社神 ^{其外小社は}
 經藏 ^{三周四面 東白天海}

△印南野 此地今村中の清みのうち有河院として今一の曠野のやうなる
 △明石郡より西より加吉郡の東へかけて三里斗のる城つるに今ノ新田
 といへる人家も多し村を治す村を治す村を治す村を治す
 是上の檨磨の園号の案のつるごとく明石加吉印南の太古の明石一園は
 てその中の押ええより明石の津田須廣の方へとも取つたりしむなりのやう
 ともあり又も系集の津田三年九月元正天皇檨磨印南のやうなる
 長款あり畷とすや
 五のうの阿まがあらをよめえ取掘りか波たぐとす

△池大明神 ^{長三斗斗其傍に祠あり} 野守山高園寺 ^{日莊守村} 八幡宮 ^村
 △石守古塔 ^{加納渡石守中村に即後理も又中村房日條之進系利別不長治の幕中}
 △天徳山常光寺 ^村 園照山常観寺 ^{村 宋佐}
 △赤松播磨守政村墓 ^{村 未村加納岩光寺にあり。和款とくは治山合戦軍功あり。室津加茂城に居る村家長浦上掃部が村字に記せしむる}
 印南の稲實之系幼太皇の后檨磨稲日吉郎姫とやせの即イナニの月洲とけ國の産之
 加吉川 け川上井田の邊よりそい郡界のれが縁道の傍して川の東の寺が所箇の口の
 逸りて印南郡の入地より一の浦の傍に流しと川の所せまりたるを「水源」
 丹波國之下村より出く槲葉多阿郎と稱て加東郡勝野とさ三草川より合入
 又一流の丹波水より出く槲葉荒田の山中より西照村より流るぬ其下流

東条川三本川等より合し加古乃驛の西より二流となり一流なる砂より一流の
荒安より入りて海に入る

まよ 加古川の波

佛頂山稱名寺 加古川村 本寺阿弥陀佛 一鑿山龍泉寺 日村

加古川城址 加古川村より八十間四方城を築き、舊名助左衛門三本別本乃幕下と云ふのは古園との
城より入る、憩息の地とのゆゑと云ふ、奥より同じて書寫山より後を隔てたたりて忠を

泊大明神 雁南の庄 鶴正社殿壯觀あり、紀伊國日高宮生石明神の御
後入るありと云ふ、社名十六六の天舟の龍の探幽門人甲田重信の画あり

希才天社 中河村あり三方より川あり、河守の
御樹森として、此より川に入る

本村城址 石碇城と云ふ本村あり城を築き、雁南右衛門に即、貞和元年赤松の附従と勇長男
雁南刑部右衛門長享徳三年家督を継ぐ本村源又郎と云ふ、又、武功あり、雁正
元年又討死の後、尚石碇の城を守り長禄三年三月、日山各宗令が、あふ討死、終つて、
て、此より、村中、又、野王山、令、別、寺、あり、あり

大津山福回寺 加古川東の端 年々正親音 用基聖徳を子

昔の福屋と云ふ、後又大津山今大義と云ひて、又村名、福屋村と云ふ、大
津子新村と云ふ名ありて、昔加古川の傍の、後之赤松、心元弘の比、法喜、徳志
寫の石碇、成、建、つ、天、心、の、乳、を、増、倍、焼、て、石、碇、の、と、砂、より、文、禄、年、中、曹、洞、宗

よび古き石碇は印南郡河南庄大津福屋山と云ふ

所名 米田村 加古川の西より、昔、米田と云ふ、は、法、喜、山、の、經、記、あり、て、法、道、仙、人、妖、術、の

八十石階 加古川より七八町 羅山神社考曰播磨風土記八十石橋陰陽
川と外田村あり

二津及び八十二津の流流之流と云、丹波播磨若、橋あり、云、小、河、の、橋、田、持、現

此岩橋の山乃、林、藤、東より西南より、む、く、い、登、る、り、二、丁、余、り、て、一、山、一、石

を、の、所、より、降、下、り、て、登、る、り、石、階、あり、お、よ、八、十、の、い、は、は、と、云、道、の、の

名、よ、り、津、本、幣、の、底、天、ヶ、赤、津、音、の、里、名、之、津、音、よ、ま、ま、名、其、の、流、を

目、よ、り、耳、又、聞、不、津、縁、流、く、は、又、石、段、又、踏、り、て、回、顧、を、り、ふ、流、流、

流、の、辰、己、より、く、川、く、蓮、瀧、よ、り、と、く、摩、耶、山、乃、秋、月、高、津、望、の、晴

嵐、よ、心、の、塵、を、も、吹、え、ら、ひ、る、砂、の、遠、帆、尾、上、の、松、系、よ、は、凡、人、の、た、ま、し

を、と、消、を、を、く、流、火、り、は、火、の、急、を、く、ぬ、り、り、れ、と、い、眼、乳、の、ち、づ、る、ふ

と、云、了、り、び、て、播、磨、勝、系、の、巨、魁、と、り、べ、く、
右、播、磨、勝、系、は、川、門、氏、
八、系、の、よ、り、ま、ま、と、播、磨、
雪、よ、り、は、あ、ま、れ、後、夜、白、く、く、凡、人、と、り、る、八、十、乃、石、を、く、
右、大、地、主、成、親

八十海原 岩場のふりく小流とく加右川の上取山

蓋瓦山佐伯寺蹟 同基差眼之所 此寺の後天の乱に遺棄し今三本郡久留米長尾取寺に

山△石屋 井田の池尾村より 戸口一間中なるさ八尺よとく内内地中より約く三間半り

より先上よとく古の墓入り入てるが一修り兎が窟とく

腰掛岩 岩座のゆより 腰とくくろくろく

毘沙門岩 毘沙門不動を彫刻とて石に刻し

石名舟 舟名村の西隣傍より 渡津水

道満法師屋敷 海石津の北に丁半岸村

妙見大明神 日吉宮本村より

津丸村 檣慶園風去記に日出雲園阿菩大津丸和園畝火香山耳利本の三山

相園とてこれと津丸とて檣慶と来りしと園お止むとて本園のいゆ

て其系不乃和と覆せて先よ座に檣慶止るを津集の形霞と号し

おま集

かみやまくと耳利本とてあひ附らて見よに印南園をり

若いのこの附らるるんけ三山お説ひるりるをわかくら山畝火耳利本の雄とけ二つのり

生石明神鳥居 津丸村路傍より 石殿をて津祈り大と二丈三尺に

又柱又流あり 華表雄石 頸然高岌 確乎不磨 千古雙之

石寶殿 辨巖室と稱凡 山腰より 石殿をて津祈り大と二丈三尺に

方高二丈六尺とて社楹の形と作りとて横と倒しとてたて根の

土基も横とて拜とる人の宝殿の座は面一石とて作りはしとる

と元より地内近園の名物龍山石の着とるよりて宝殿も一箇も十

余丈の石山の中と切換即ち切換する不とて造り其不に倒し捨てる

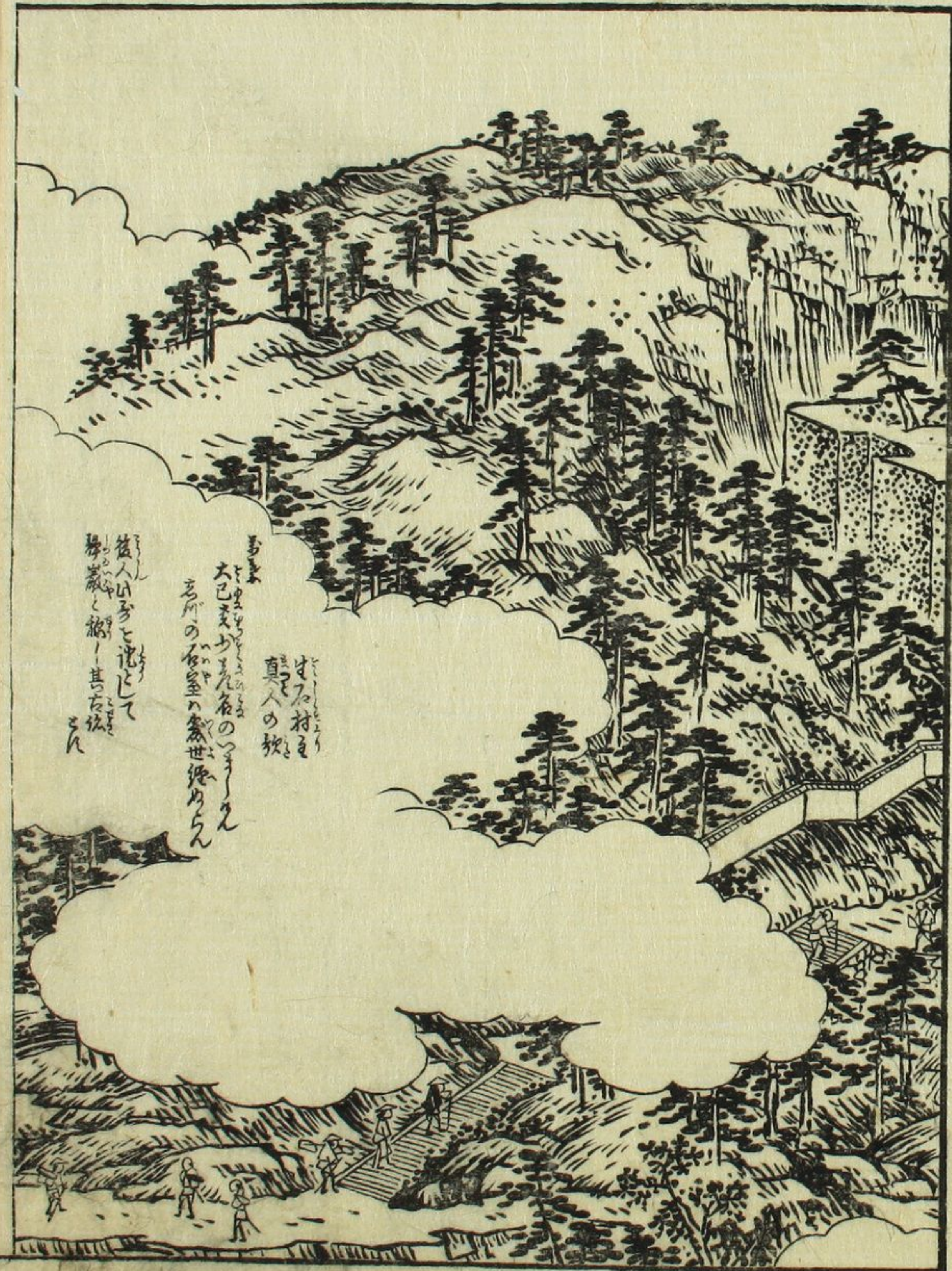
とまよと土基と根との間に方とて切けて換くことぬくことなは

自ら去漏して松と生んに周水の水の湧りしるは先極て空注るんはなり

若徳天皇自推奉中みなる其の社に於ては是れを殿とてしよ赤松別不字と勅記し類後し

て今い生石明神と後明神二社と幣殿と流座とるものなり津徳赤松系不思後津神人の縁起とて

るものよゆつて是れを聖凡の社を御今其徳の園赤坂の宮安樂寺よりとらる

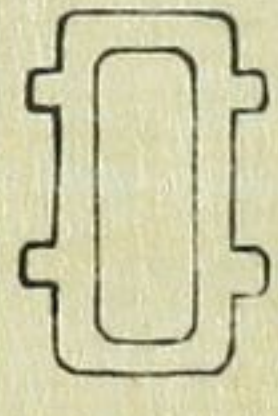


後入の多しと記して
 藤原の御所 其石塔
 真人の杖
 大己まふまのつり
 志所の石室の衆世傳めらん



石室の殿

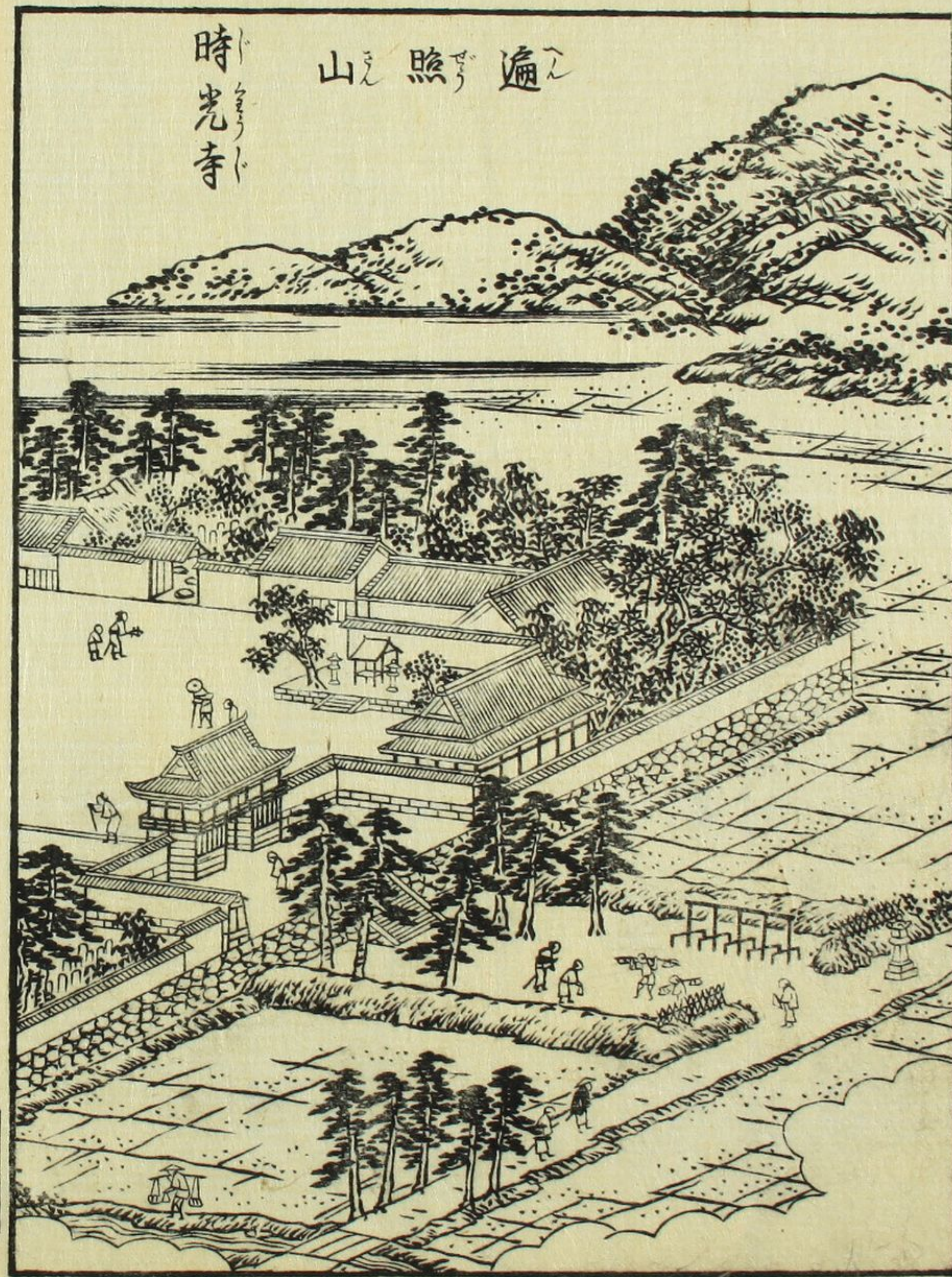
○我々石室の制他は抑ひて異つたはし今より工備がよかきよりんはなほ他
 とも要らざらん只横は削りたるのこりちかりを考ふるのみなり
 ○龍後園と妻郡人形が系と云ふ石の人形あるが人又後世を名ると云ふ石人
 の傍に石殿三間の物ありしと云ふ是れ龍が窟と云ふなり又龍丸と妻の名はおかし
 ○又二流と云ふ石の石山に付ての系を以て成りし宮の石の津と謂ふの
 心うむ生石のつりへり地名を龍丸の生石村と云ふはけ不の唐の人なり
 一又神窟と云ふはけ地り奥より石室なり若や龍後園計天皇の
 御一石生石のつりへりしを以てし今より石室なり又紀
 州三徳の石室の致は付て修勢を人考ふ石丸園人云其園邑智郎岩村
 又大方の石室あり古老おかしく大汝少名名名の二津の地は入らむと即龍が
 石室と云ふ古名なり今より龍後園より二千里に遠都といふは龍が石室と云ふ
 龍山石 石の宝殿の造りけし石室なりて既を穿穿り今より石砌溝海乃
 垣はれて細長く切替の小川より海に接はる積石地方は寶臺と云ふは龍が石室
 なりと云ふは龍の地市村に石工ありけり西の奥は是は後市とて其南の尾崎
 龍が石室と云ふは龍丸の地あり古老ありは龍丸の地なり即ち龍丸の海濱なり
 石室殿のつり後の西の石室
 あり長九尺斗椽に尺五寸五寸
 古代の石槨の蓋なり



阿弥陀宍村 釋名あり東西二村家数多形多しなり山系名と
 道満舟戸 舟名村南一丁舟あり清水は早天と濁るなり
 洗臺 舟名の浦一丁舟あり清水は早天と濁るなり
 白矢薬師 舟名の浦一丁舟あり清水は早天と濁るなり
 遍照山時光寺 舟名の浦一丁舟あり清水は早天と濁るなり
 阿弥陀如来開基時光上人上人信性多田満仲九代の孫源光親御
 かり天福元年三月十五日武庫川の邊より淨徳寺西山上人の子なり
 時光坊と号け湖高德と云ふ感徳乃阿弥陀と謂ひて建長元年
 曾根の社より西に精舎と建て後文永十年六月十五日今の時光寺と稱
 一尚旅容塔塚のふとく小系を阿弥陀宍と改む道村は時光寺を
 時光寺と云ふなり曾根天神の古寺の法寺と云ふ屋内正月の松
 飾禁じて今も云ふなり
 岩尾山大日寺 西の山なり 奉る大日如来真言宗なりし圓分寺の末流に兵火に



阿彌陀の行方
 大勢の衆を
 本依願の菩薩
 用山の上人の
 氣概記
 委し
 客よ
 器
 以



遍照山
 時光寺

六騎武者
の塚



とて後再建の時先寺の末とありけり荒廢の時よりや別長治の幕下
 後山に近寓居せしとを先とて大日山の構とあり
 五輪塔 年号曆應天皇三年三月之外に字の刻字明るは衆の二字より
 あり是は史傳後守龍長の墓なりと建武三年に地は自害のりる年記に
 あり尚下の六騎武者の墓に合はざる

六騎武者塚 延元元年足利氏九州より来りし
 時服屋義助播磨引越ししと史傳後守龍長子息三郎高德三石の
 南の山邊を築きとて之に浦(出)脇屋敷又退付んとせり高
 徳とての軍と病とありたるが同くありてこれに相知る僧は
 赤松邊を打とると赤松が兵治外逃りたるに討破り那波より阿弥
 陀が宿とて十八夜我い主従六騎討りて堂に入ると自害とあり
 赤松が勢の大勢あり跡九郎重氏とあり者葬れりて送骨とあり
 郷へ送りしりる年記よりあり播磨記に後後三郎高德の墓とあり
 之は誤りなり

佛心寺

釋より一丁斗南小鉢村 寺の境内にあり五輪塔あり備仲乃石塔とらひ佛人延喜元年付五輪の日に又同東の圓石の去手より石棺を掘り其去手の昔より佛心寺の法守とらひて正月奉り改めは供膳をせしむなり

釋より一丁斗南小鉢村

寺の境内にあり五輪塔あり備仲乃石塔とらひ佛人延喜元年付五輪の日に又同東の圓石の去手より石棺を掘り其去手の昔より佛心寺の法守とらひて正月奉り改めは供膳をせしむなり

石棺より二尺斗長さに尺巾二尺斗蓋の上より又二尺に方る二尺斗石の蓋に印笏蓋より小細砂りて拈骨打交より又三尺斗の小籠あり中より金きせの舟より佛の物ありて櫃の外膚つきて埋より佛の小籠より一村の牛多し記よりあり是れ出ありて恐むしの下り埋より

安養寺

後居村粟 初原寺 佐古村津古末毎年七月六日詣那彌とらるる文藝二年文賢法師作とら

所名

伊保湯

荒年の西より今泉湯より昔の伊保の湯とら大社の湯より今も多形斗の村あり 新橋より 大正嘉吉

加茂羽神社

同加茂よりあり昔村中よりありてそは佐古村末毎年中正親町大徳とら連御の寺より同徳の歌より極まり

飛鉾塚

右中より西より法華山の用波法道仙 高座石 仙人これより座して中

綱堂

奥津村に石佛のありて法あり是れ附先上人ゆゆの寺にありてありて綱堂ありとら附光の地記あり

梅の舟

一名石蔵不塔のありて奥津の末より村中の社にありてありて梅の舟とらありては附酒とら

曾根天満宮

曾根村 糸津宮の靈 九天徳命 右後田表命 此の良津とて初九月十日

延喜元年曾根公孫孫一請遷の附所記とらは伊保の隣へありてありて一丁斗西捨美の園より方の懸勝眺望より又け宮と捨美天津とら一丁斗西捨美の園より方の懸勝眺望より又け宮と捨美天津とら一丁斗西捨美の園より方の懸勝眺望より又け宮と捨美天津とら

菅原道真

菅原道真より三奉議是善并三の子之十一歳より詩と賦

月耀如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡轉 庭上玉房馨 貞観中文字より奉りて下野持孫と捨り及奉りて全蕃女とあり内記より醍醐帝後即終ひ詔より及奉りて平と日と萬機の政を推し心三後より叙し中宮と奉りて兼り昌泰元年内覧の書を奉りて右

曾根

天津

曾根の松

津版の善あり
 菅の息想の流
 松の苗と枝て我入
 飛くハ葉一ト折
 終ふ既又新
 余も信の孔あり
 枝乾と云と云ハ僅
 三日又最歎地と地
 云く南水又流と来
 西又耳ハ楮の大き
 毛天ハ尺と云と云
 良乃方より伸の向



二十間身乾より巽の方
 方十二間余其餘に方
 へて恒蓋りて
 又風雪のみふおれ
 りを恐るく枝を
 をんで支入り百と
 て美人磔ハ釘の

翠編者
 氷乃
 雲本
 うま

惜哉
 舊橋



多きものしるしを帝を感ずる人なりて我らも祠を建てて増修せしめたり
後して人々を導きせしむるは正史下節愚昧暗痴の如く是にして神聖者の
肝腸を穿つるやあはれ雷鳴を以て必云のこころを是に却て云ふは
つと悲しむべきなり

○時平の國自基隆の長久寺に奉安して心控く奉と視て甚は屠道真と
物よりて多し麻あり其の心は皆やむは罪進歩ありて三は叙せ
三十九とて其の終り六年後之に後を政大臣と爲り和教とす
又師の凡俗甚き者にて衣服華麗なるは帝制とて禁せしめ其の
以者後(帝)帝先と爲ひ終り附平帝と密に謀りて自解衣と着て帝の側
帝伴て大に怒り百僚の長として國禁と爲るやと御けしきあり附平
ととと御と屏け後歩す降て門と開る是より凡俗教を改むる云云
正史に於ては元より側侍者九牙として邪正と辨るべき其術と傳る
似て甚野鄙

蓮教寺

牛谷村の蓮教寺 日蓮山の麓に在り

時光上人淨戒跋望の云云

檜美山

日蓮山上の檜美山 日蓮の遺蹟ありてまことと云ふはよくしるす

所名所名

日本紀推古十一年に月出六皇子播磨又別府後妻舍人姫玉奉石
又鹿以仍て赤石檜美園乃と云ふ葬ると云ふ此亦なりや

檜美浦

有根より大塚のなり

大塚

檜美山の麓に在り一名大塚村なり

けりりには曾根の形八家新村など

東西二里計の岡陵嶺より電燈乃教に百軒なり赤穂新漢
あり勝なり

小綱い

いづれに繩よりなりと云ふあり地傍の浦 西の

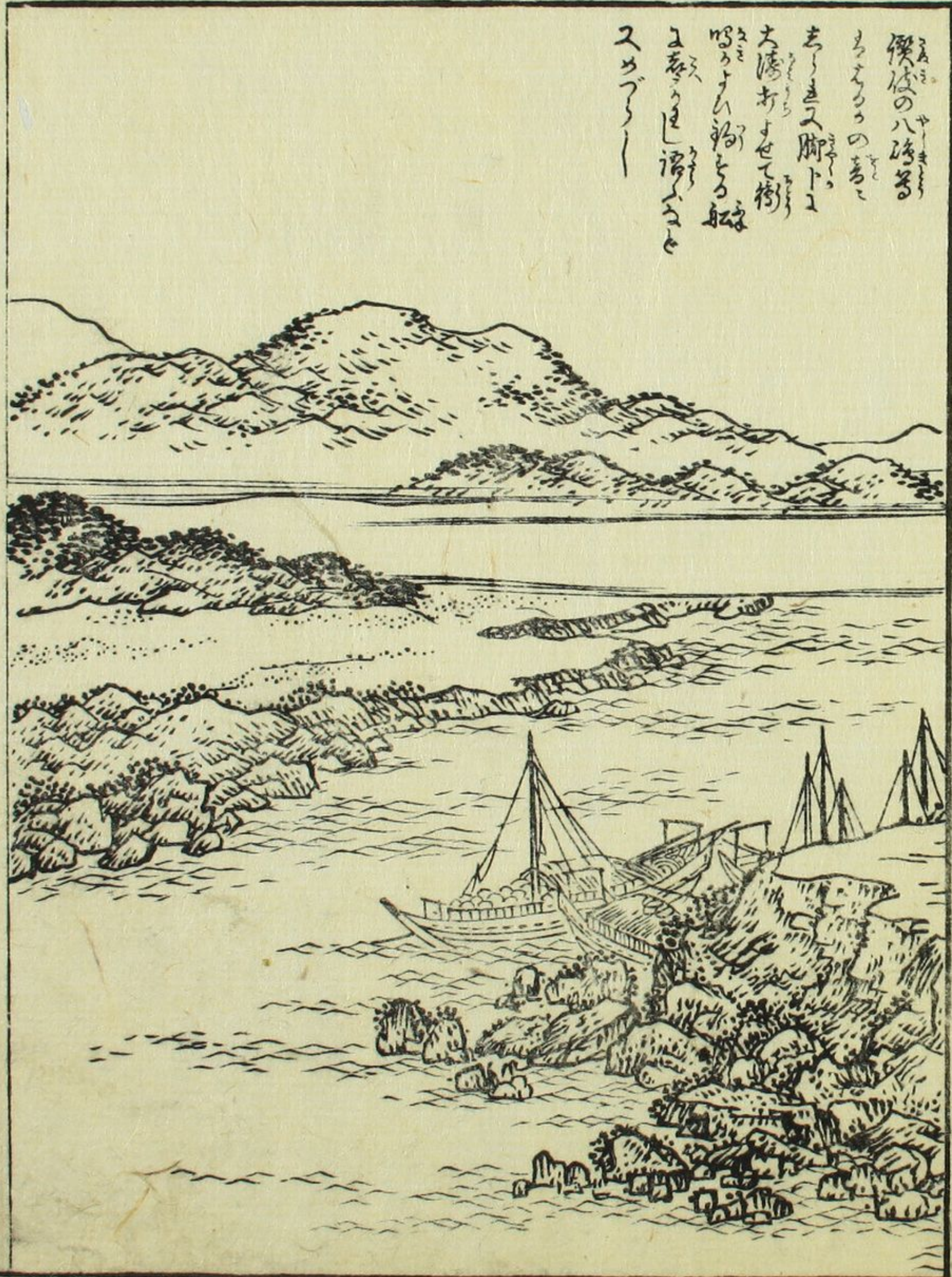
的形

大塚村の西の村に在り

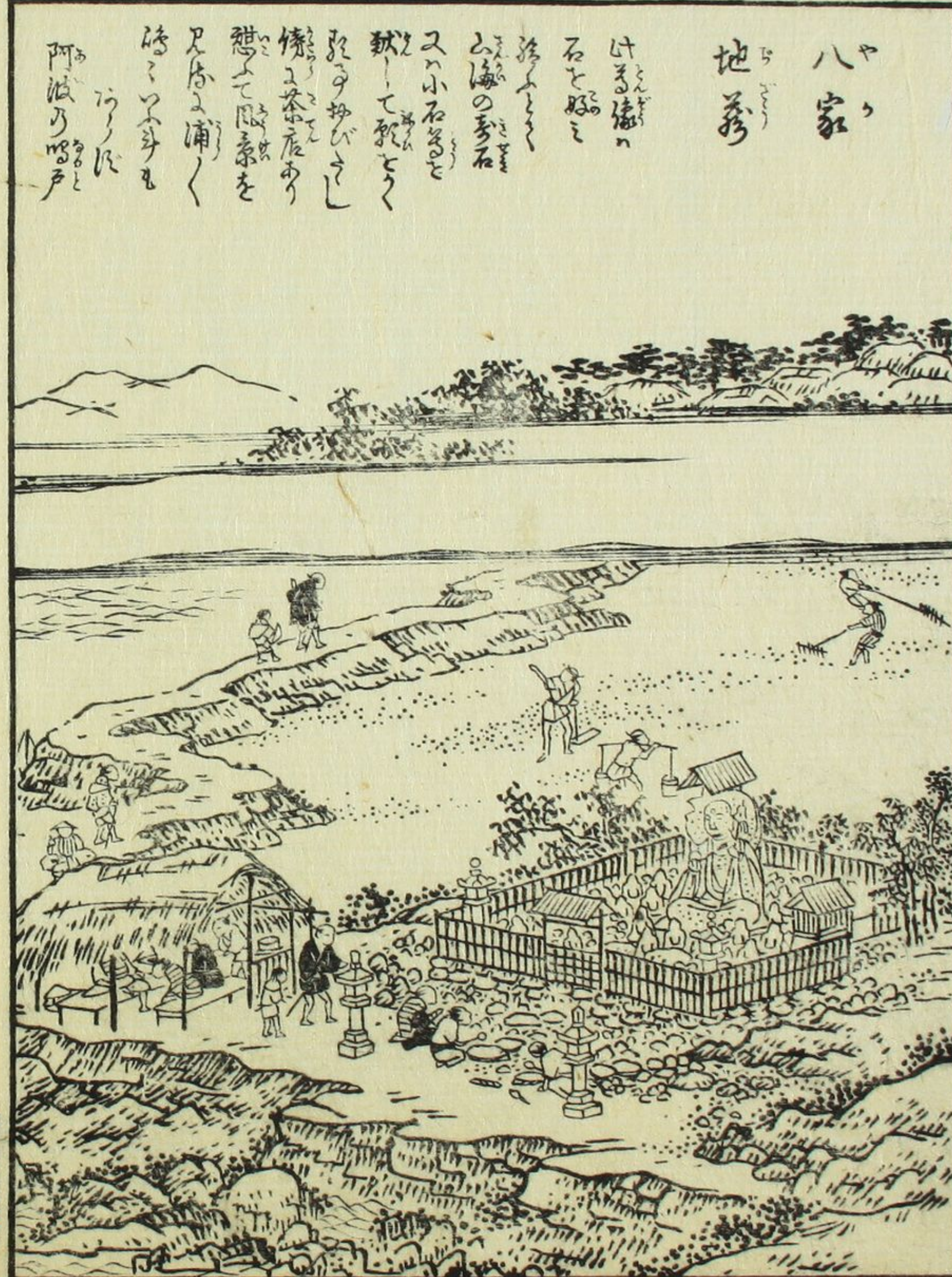
英和日記云宝徳年中出雲郡山一討手下

向乃附郡島の諸士と教を誘集り印南郡の的と云て軍馬乃先覺と
各軍制弓馬を欲むはを的形と号以後は享徳二年三月又日手寺
袖内して各を造り云
まことそのともやも極ま向いなる的形といふはよくしるす
的この湊のりたなる波をばつまふといふはよくしるす





僕等の八咫草
 くらぐらぐらのまきこ
 去りまふ脚ト
 大橋おすせて物
 鳴らす物とる船
 又まふは 溜くまふ
 又まふ〜



ヤ
 八家
 地
 形

けりる海
 石と好
 又小石
 軟して乾
 然りて乾
 傍に茶店
 懸て障
 足舟と浦
 阿波の鳴戸

イコトのひく様は附はしこれ石鐘乳の中よりせむる抄之江州目川山
州西山三祐寺なりといひあり

中道山城趾 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て
志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

中道山安樂寺 志方より庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

志方乃城主掃橋元京進秀則再建中真公言と云内赤松上總公墓あり

滿祐山圓福寺 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

宝蓋院塔は刻せり塔基の圓趣と供じり水溜り赤松掃磨寺則系の男

掃回八郎有系が石櫃の蓋之法名園福寺殿と建保年中の人志方の

飲多知多八千石又寄附あり其父系始末の書法古賢足伝ぞ

印南郡之内高畑村の寺飲高參石輝政以来赤松新入御所の進出は今
別後あり後いし

慶長十八年

園福寺

八回を後守乞

花押

八幡宮 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

天津山古燃 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

長男氏妻二男家則一談即ち百三十七人至徳三年九月二日殿撥切て是より

大澤清水 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

大友山長樂寺 志方の庄園村より赤松新入御所の廢居城とて教代相續て

帝乃御所託胎祈のる相國清聖地苑六十六軀を刻せて國毎一

まると安直以今け寺のわする其之靈應多き安徳帝降誕在せしころり

助永池中鐘 助永村の用の溜池の底に埋りて是長樂寺の古鐘なり水より後深なるのよ
て見るゆいはたまに旱水拂座の時人掘りて見れば雨ふるころり

高御位



山上は名石多し一の門二
 の門押入丸文と曲折松
 して太古津屋の遺蹟
 鏝ふをくもりて此城
 城法の名なりやうにせよ

津幸一疾乃る里民
 此の群衆一與舎の
 板垣をくもりて此
 うらやまき
 差鹿カトフ死タトフ
 滝で派とまろトノフと
 人皆大善小若てゆ



高御座山

志方後年の二郷

是石宝殿よりある石の一層高座明神の坐し

例承九月十九日神輿一基山上より守り奉るは日く生る事より

是と林麓に迎へ高座山と宝殿との同神幸の鏡合ふ生る事より神

輿と共に雙へ積り奉る事一夜之とて山と高御座と号する神座の

後之里俗の傳ふ山上石屑多き宝殿制他の所より送り奉りし

もの之とはつとも石屑へりりり守り奉る事今今捨る事とていぬ

其と昔に生る事乃山下波濤乃満じしものを燃し神意する事より

大谷村 英知記云永享十二月結城合戦の時赤松并 山家西海の朝

史の上洛を防ぐとてけ附兵糧の所より山郡志方の庄内とて大谷

を立り依て号く

鷹巣山 高座の西のろくまきとて岩壁人の通へる事より松が枝より

とむとていぬ事より偶々も事より採りて是に依り村の少補居山と

唐が浮村 鷹の窟の少之を名る 志吹祠 志吹村より石とて神と

唐が浮村 鷹の窟の少之を名る 志吹祠 志吹村より石とて神と

附録

加西郡

法華山一乗寺妙行院

昔は境内廣くして加西印南飾赤三郡と跨りあり大門の右邊西の川より三丁西へ示しあり三方道標あり

傳曰開基法道仙人なり法道の靈籠る山仙苑五百持明仙の其二

壽命を奉りて十方世界に於て神カ自在之身又副へしもの

み手大悲の桐像宝持の事とて満州に供奉と乞へり此宝持仙人

とも稱し海中付来の船み来と乞へり此の神を生る事より

宮の西南の石上は是なり 今又此の記 け余画上下記と

車停石標 石階の 金輪聖主自金堂一町 依勅造立 依勅造立

武庫車停とはは久正和九十九代花園院後醍醐天皇より召し又金輪聖主

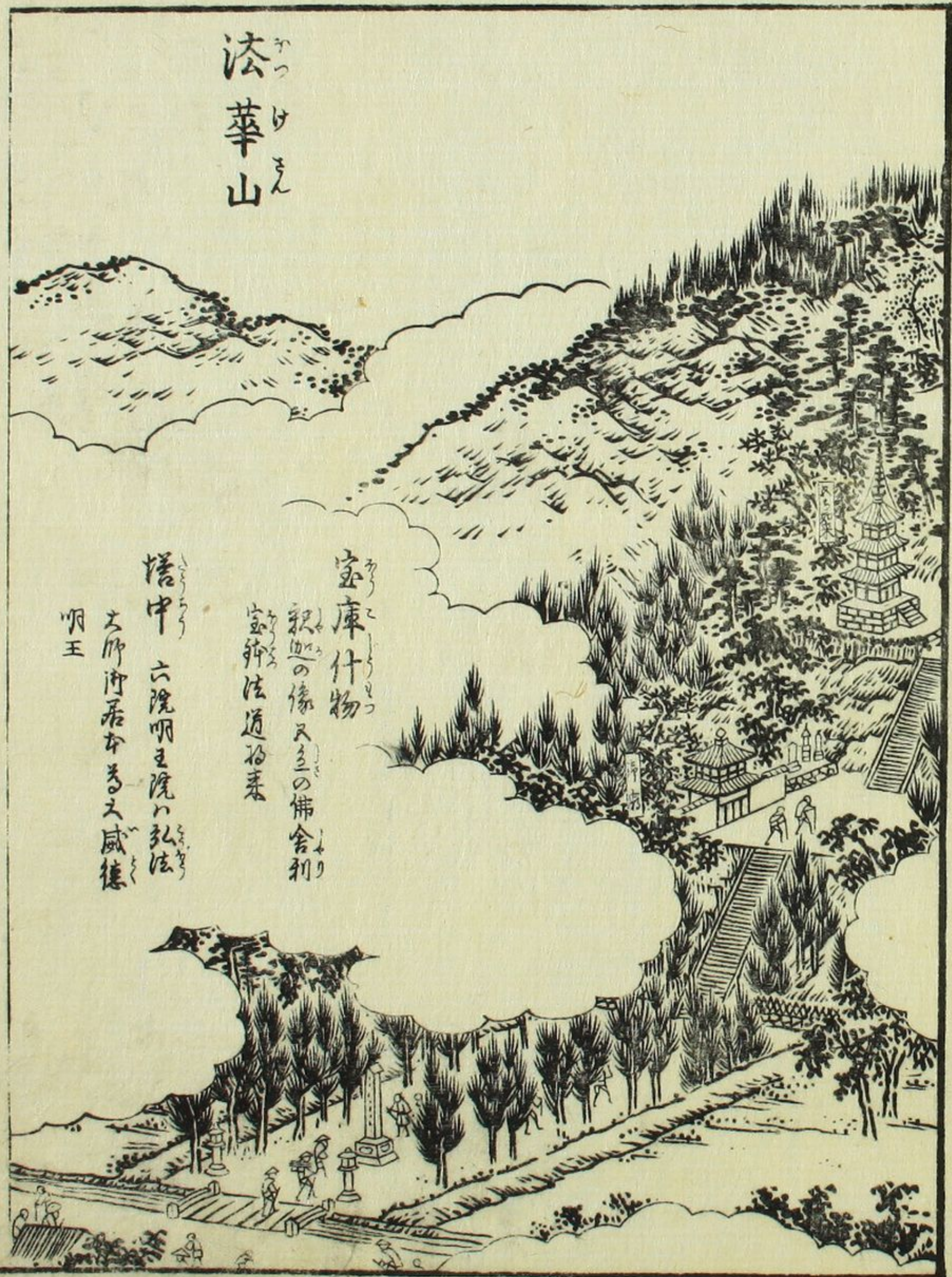
と奥院の廟を召し久正和九十九代花園院後醍醐天皇より召し又金輪聖主

妙行 孝徳天皇は是神元云不後醍醐天皇は是神元

岩掛樹 本堂の上方よりあり花あり小園の裏あり

岩英 山乃産物飯石もこの名中 寺傳曰文化元年秋弘師養母とて若税貞祖とのせて海上とて

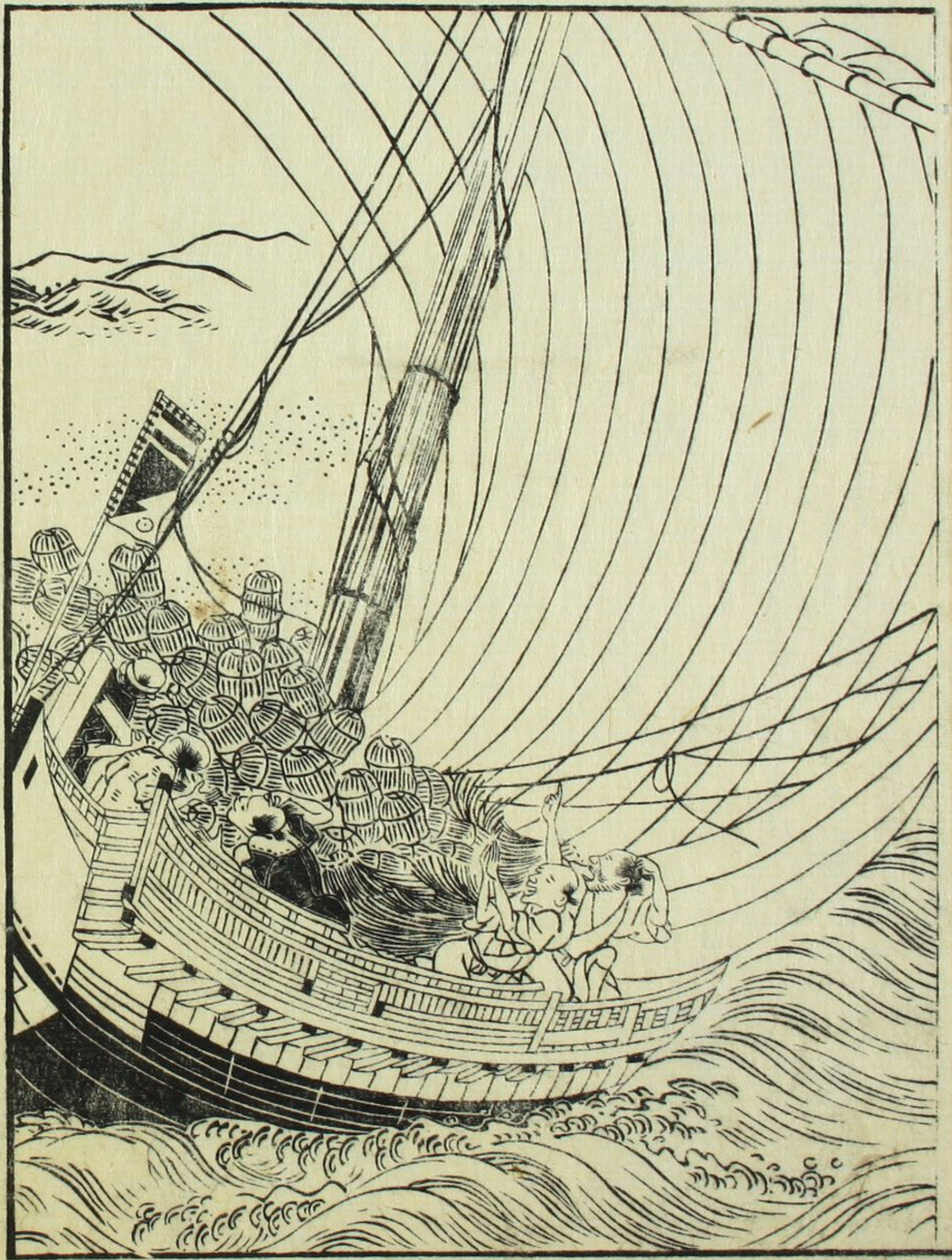
法華山



宝庫什物
 釈迦の像又三の佛舍利
 宝鉢法道石表
 塔中 六院明王院の弘法
 土師河原なる大威徳
 明王



孝徳天皇内難元年
 聖訓用基法道仙人
 西國二十六番の札所
 不為親安寺より一丈八寸
 英令佛天竺佛素
 服士毘沙門不動
 服檀元三五所画像毘沙
 門毘沙門の年 三層塔
 又純如素常妙世阿蘇
 陀 九層石塔塔腰の傍
 ヲ何り 用山の所教寺内
 論秀真院法道仙人の廟
 巖屋の内より法華
 漢偏の石像あり



又法道かの神と飛せて其末を乞ふ及安んこれに御厨の授祖より
私に終に乞ふに終つて此の神に空しく飛入り小松中の末後悉く
神に付て空を飛来り雁の如く後安ん大に移る山よのかりと
飛と附せば又其懐えのどく如く飛入りたり其の帝は奏聞し
之れに於て御不縁の事ありて法道を石と持念を以て玉體平
安はしくたり其後白雉元年勅を以て伽藍建立就て即ち奉
其後法道一語を誦して仙苑に歸る

我化有情乘此地 留置像神舍利羅 一涉斯境所求得

永出三途見佛陀

い余法道の言ひ程舎を付くはこ今尚なるとの事

或云空神といひ飛神といひ雲々の悟の如くともやとて人々又揚神空
と云ひあり云云右物悟りの言ひを拾遺にもとより

又或云物悟りの言ひは又とて御厨奉直の末私に安ん及安ん其言とて此の
法道邪樹の妖人の如く強て實は法道が如く安ん及安んは後世
凡俗の妄言也

播磨名所巡覽圖會卷之三終

